



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 3

Nov. 2001

目 次

大会・講演会のご案内

- 日本植物分類学会第1回大会および2002年度総会のお知らせ.....2
 日本植物分類学会関西地区講演会のお知らせ.....5

諸報告

- 設立総会報告(出版物についての追加報告).....6
 評議員会報告.....7

お知らせ

- 学会費納入、ご確認ください！.....9

寄稿

- 種子植物談話会からの報告・1..... 10
 種子植物談話会からの報告・2.....11

追悼

- 粉川昭平先生(1927-2001).....15

連絡員から秋便り

- シダ便り・1.....16
 亜熱帯の島便り・1.....18

- 会員消息.....19

大会・講演会のご案内

日本植物分類学会第1回大会および2002年度総会のお知らせ

日本植物分類学会第1回大会準備委員会

日本植物分類学会第1回大会を以下のように開催します。

(1) 会場

国立科学博物館分館（新宿区百人町3 23 1）

(2) 日程

2002年3月15日（金）午後：シンポジウム

「ヒマラヤ産植物と菌類に関する研究の最近の動向（仮題）」

終了後：評議員会

3月16日（土）午前：口頭発表

昼：総会、学会賞の表彰

午後：記念講演、ポスターフラッシュ、ポスターセッション

夕方：懇親会

3月17日（日）午前：口頭発表

午後：口頭発表

(3) 講演時間

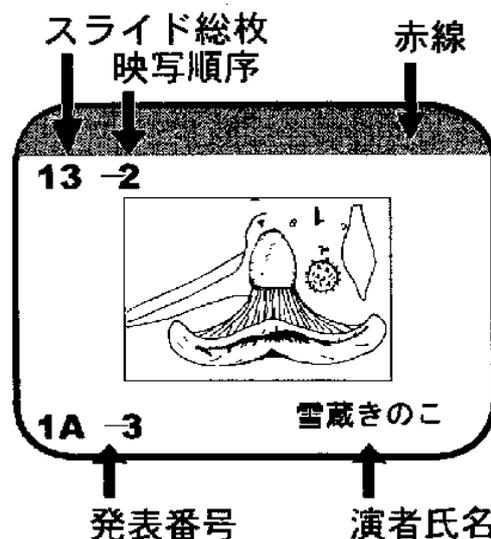
1) 一般講演 15分（講演12分、討論3分）

2) ポスターフラッシュ 3分（スライド5枚以内）

なお、発表時間、ポスター会場の面積等の関係から、講演申込書の発表形式の項で、できるだけ「どちらでも良い」を選んで下さい。プログラム決定次第、発表をいずれの形式でお願いするかご連絡します。

(4) スライド、OHPおよびポスター

発表には35mmスライドとOHPが使用できます。スライドには図のように、発表番号、演者氏名、スライド総枚数 - 映写順序を記入し、プロジェクターにセットする時上になる縁に赤線を引いて下さい。スライド映写係はいますが、スライド受付係はありません。会場入口にスライドホルダーと発表番号札を用意しておきますので、自分でスライドをホルダーに装着し発表番号を添えて、発表順番の2番前に映写係に渡して下さい。発表終了後は、映写係からホルダーを受け取り、元の場所に戻して下さい。



ポスター発表用の掲示板は、横120 cm、縦180 cmの板です。左上角に講演番号を貼るための、縦横10 cmの余白を残して下さい。

(5) 大会参加費(講演要旨代を含む)

2月15日までに申し込みの場合	3000円(一般)、1000円(学生)
2月16日以降と当日申し込みの場合	4000円(一般)、2000円(学生)
要旨集別売価格	2000円

(6) 懇親会

3月16日(土) 午後6時より

会場：ホテル海洋(会場までの交通案内図を参照)

会費：2月15日までに申し込みの場合 6500円(一般)、5500円(学生)

2月16日以降と当日申し込みの場合 7000円(一般)、6000円(学生)

(7) 昼食

3月16日昼休みに総会を行いますので、ご希望の方に弁当(600円)を用意します。大会参加申し込みの時予約して下さい。

(8) 参加申し込み

大会参加、研究発表の申し込みは同封の申し込み用紙に必要事項を記入して、下記宛て郵便またはファクシミリで送って下さい。電子メールによる申し込みは受け付けません。なお、講演者は本会会員に限ります。会員外で講演を希望される方は大会当日までに入会手続きをして下さい。

申し込みの締め切り

発表申し込み 1月31日必着(郵便またはファクシミリ)

発表要旨原稿 2月15日必着(郵便のみ)

大会参加、懇親会の申し込みは2月15日必着(郵便またはファクシミリ)

参加申込書および要旨原稿の送り先

〒305 - 0005 つくば市天久保4 - 1 - 1

国立科学博物館植物研究部内

日本植物分類学会 第1回大会準備委員会

Fax: 0298 - 53 - 8401

参加費送金先

日本植物分類学会 第1回大会準備委員会

郵便振替口座 00150 - 0 - 68881

(同封の振込用紙をお使いください。会費の口座とは異なりますのでご注意ください。)

(9) 宿泊

会場付近にはたくさんのホテルがありますので、各自で予約して下さい。

(10) 大会に関する連絡先

〒305 - 0005 つくば市天久保4 - 1 - 1

国立科学博物館植物研究部内

日本植物分類学会 第1回大会準備委員会

土居祥兌 Tel: 0298 - 53 - 8973、y-doi@kahaku.go.jp

門田裕一 Tel: 0298 - 53 - 8979、kadota@kahaku.go.jp

または Fax: 0298 - 53 - 8401

会場までの交通案内



日本植物分類学会関西地区講演会のお知らせ

関西地区講演会担当委員 福岡誠行

日本植物分類学会関西地区講演会は次の通り開催する予定です。お誘い合わせの上ご参加ください。

(1) 日時: 2002年1月20日(日) 10時30分から4時30分まで

(2) 場所: 大阪市立自然史博物館

大阪市東住吉区长居公園1 - 23

電話: 06 - 6697 - 6221

(3) プログラム

10:30- 岡本素治(大阪市立自然史博物館)、岡田博(大阪市大・植物園)、塚谷裕一(岡崎国立共同研究機構)

「ヤブガラシの2倍体と3倍体について」

11:15- 美和秀胤(京大・理・植物) 「ジャゴケ類の分類」

12:00-13:30 昼食・自由時間

13:30- 村上哲明(京大・理・植物) 「シダ植物の理想の分類をめざして」

- 海外の野外研究と実験室の仕事(DNA解析、染色体、交配実験など)を
組み合わせて、いかにして表題の問題に近づくか? -

14:30- 北川尚文(奈良産業大) 「植物用語の歴史」

15:30- 高野温子、三橋弘宗、鈴木武、永吉照人(兵庫県立人と自然の博物館)

「GISを用いた自然環境情報の活用方法」

(4) その他: 講演終了後懇親会があります。

(5) 会場へは、地下鉄御堂筋線「長居」駅3番出口から、長居公園内を東へ約10分歩いて下さい。途中で、花と緑と自然の情報センター・長居植物園・自然史博物館入口、情報センター入口、花と緑のまちづくり館入口を過ぎ、自然史博物館通用口からお入り下さい。他の入口からの入館は、入館料が必要になります。

問い合わせ先

関西地区講演会担当委員 福岡誠行 (頌栄短期大学)

電話: 078-842-7035 ファックス: 078-851-2154

諸報告

設立総会報告（出版物についての追加報告）

会長 加藤雅啓

本学会では重要な事業の一つとして出版物を刊行しています。新学会設立を契機に英文雑誌、和文雑誌、ニュースレターなどを発行することが決まりました（会則第4条）。その刊行物の名前について最終的な報告が抜けているとのご指摘を会員から受けました。それに関しては、学会解散・統合の準備などに忙殺され、はっきりと確認をとらずに事態が推移した部分もありますので、経緯をお知らせしながら、追加報告いたします。

1. 英文雑誌名

名称：Acta Phytotaxonomica et Geobotanica

略称およびロゴ：APG

学会統合に関連して時間をかけて検討したもっとも大きな問題の一つが、英文雑誌をもつとすれば名称を何にするかということでした。統合問題検討委員会、(旧)日本植物分類学会評議員会、植物分類地理学会運営会議で検討された結果、上記の名称を使うことで合意し、略称ロゴもあわせて設立総会で説明されました。

2. 和文雑誌名

名称：日本植物分類学会誌

略称およびロゴ：分類（英名 Bunrui）

新しい出版物である和文雑誌の名前についてはいくつかの案が出されましたが、(旧)日本植物分類学会評議員会、植物分類地理学会運営会議が了承した統合問題検討委員会案は上記の名前を予定するというものでした（「ニュースレター」、「やまぐるま」に載っている学会統合案の学会刊行物に関する案をご覧ください。ただし、略称ロゴは「予定」の段階なので案には書き入れませんでした）。その後若干の意見交換があったものの、名称と略称について最終確認をしないまま推移し、両学会総会、新学会設立総会に臨みました。設立総会では「日本植物分類学会誌」と「分類」の名称が案としてややあいまいな形で提示されました。

3. ニュースレター名

名称：日本植物分類学会ニュースレター

設立総会では「JSPS Newsletter」の名前が出されました（後日、他団体名称と重なるため変更された）。

設立総会では、会則案とそれに付随する出版物の名称案などを一括して審議、承認されましたが、和文雑誌名の決定は必ずしも明確ではありませんでした。そこで、評議員会において出版物の名称が確認了承されたわけです（別掲議事録）。今回の問題については当時の会長・幹事・委員に責任があるわけですが、とりわけ案の取りまとめ役であった私の責任は重いと感じています。会員各位におかれては事情をご理解いただき、上記出版物名をご確認下さるようお願いいたします。

評議員会報告

庶務幹事 梶田 忠

日本植物分類学会評議員会が、2001年9月26日、東京大学駒場キャンパス15号館101号室で開かれました。わずか一時間の会議でしたが、日本植物分類学会発足以来の会務の進行状況や問題点が、活発に議論されました。ここに議事録の抄録を報告します。

評議員会議事録抄録

開催日時 2001年9月26日 12:00 - 13:00

開催場所 東京大学駒場キャンパス15号館101号室

出欠状況

評議員 出席：原田、伊藤、永益、西田治文

欠席：北川、川井、邑田、高相、角野、田村、村田、植田

(評議員出席4, 委任状出席7で本評議員会は成立)

役員等 出席：加藤、梶田、高野、綿野、藤井、西田治文、岩槻、井上

欠席：岡田、秋山、西田佐知子、布施、福岡

- ・議長として加藤雅啓会長が選出された。
- ・加藤会長より議事の進行について提案がなされ、審議事項から先に協議された。

審議事項

1 決算案、予算案の承認、事業計画スケジュールについて

本学会の総会は例年3月末に開かれるため、新年度になってからの3ヶ月強は予算案、事業計画案が承認されないまま会務が進められる。このことについて、毎年12月に評議員会のメール会議を経て、暫定的な承認を得たいという提案があり、協議された結果、本提案を採用することが承認された。

2 出版物発行回数と科研費(出版助成関係)申請について

英文誌は現在年2回の発行であるが、これを年3回の発行にしたいという意見が会長から提出されており、これに関連した資料が提出された。様々な意見が述べられ、協議された結果、3号発行を目標にして原稿を集める努力をするという方針で合意を得た。また、研究成果公開促進費出版助成への科研費申請を行うことが承認された。

3 会費納入の方法について

会費の納入に関わる事務手続きを簡素化、効率化するために、郵便または銀行口座の自動振替を導入したいということが提案された。協議された結果、自動振替を採用することになった。採用に当たっては、

- ・会費納入は原則として自動引き落としにすること
- ・自動引き落としにかかる手数料は会員負担にすること
- ・自動引き落としができない会員は、従来通りの方法を用いることが確認された。

4 転載許可について

学会誌掲載内容の転載許可申請があった場合の対応方法について、協議された。転載許可希望があった場合は、会長、担当評議員、編集長、庶務幹事の話し合いで決定し、評議員会で報告することが決定された。今期の担当評議員としては永益評議員が選出された。

5 動物分類学会との分類学会連合について

動物分類学会と共同で分類学会連合をつくることについて、日本植物分類学会としての取り組みが協議された。日本植物分類学会としては参加する方針であることが確認された。

6 雑誌の電子出版 (J-Stage) 利用について

科学技術振興事業団の科学技術情報発信・流通総合システム利用(J-Stage)について、協議された。幹事会で参加の形態をさらに検討することになった。

7 雑誌の交換について

交換で得た雑誌の所属と会員の閲覧の権利について協議され、諸般の事情をさらに調査することになった。

8 雑誌のタイトルについて

日本植物分類学会の発行物のタイトルに混乱が見られることが報告され、協議された。当学会からの定期発行物3誌のタイトルは以下の通りであることが、本評議員会で確認された。

英文誌：「Acta Phytotaxonomica et Geobotanica」。「APG」は略称やロゴの扱い。

和文誌：「日本植物分類学会誌」。「分類」は略称やロゴの扱い

ニュースレター：「日本植物分類学会ニュースレター」

報告事項

・会務、会計、編集、ニュースレター、図書、植物分類学関連学会連絡会、ホームページ、関西地区講演会について、それぞれの担当者から会務の進行状況が報告された。また、以下の項目についても、担当の各委員等から報告があった。

- ・学会賞について
- ・IAPT シンポジウム 2004 について
- ・学術刊行物指定申請について
- ・バックナンバーの価格について
- ・第2回大会開催地について
- ・和文誌の表紙案

お知らせ

学会費納入、ご確認ください！

会計幹事 高野温子

本学会の今年度(2001年度)会費の納入を受け付けております。新学会への移行のため、いままでとは違う時期に納入していただかなければならなかったせいか、未納入の方、納入額を間違えられている方が多く見受けられます。今年度分の正しい納入を済ませられたかどうか、今一度ご確認ください。

旧学会で2001年度分まで納入済みの方は、その分を新学会の会費に移行させていますので、納入いただく必要はありません(差額の納入は必要です)。植物分類地理学会員だった方は、振込口座が変わりましたのでご注意ください。(旧)日本植物分類学会員だった方は、会費金額が異なりますのでご注意ください。

一般会員 5000 円、学生会員 3000 円です。

口座番号：00120 - 9 - 41247

名 義：日本植物分類学会

なお、来年度以降の学会費納入について、自動引き落としの導入を予定しております。手続きが整い次第、みなさまに用紙をお送りする予定です。学会の円滑な運営のため、皆様のご協力をお願いいたします。

編集後記

実りの秋になりました。朝日連峰の麓へ遊びに行きましたら、ナメコやエノキタケが楽しそうに生えていて、こちらも楽しくいただきました(合掌)。でも、昔マタギだった方に聞くと、今年はブナやアケビなどの実が少ないそうです。朝日のクマヤリスたちには辛い冬になるのかもしれませんが。みなさまは、どんな秋をお過ごしでしょうか?おいしい話がありましたら、ご一報を!

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学博物館

西田佐知子

電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5767

Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

寄稿

種子植物談話会からの報告・1・

- 今年度の活動

田村 実 (大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園)・藤井伸二 (大阪市立自然史博物館)・西野貴子 (大阪府立大学総合科学部)・布施静香 (兵庫県立人と自然の博物館)

種子植物談話会は、約26年前、京都大学理学部植物学教室分類学講座の大学院学生さん達が中心となって始めた勉強会に端を発しており、現在では関西在住の植物分類学、植物生態学、遺伝育種学などの研究者が集まって、2ヶ月に一度、発表会や野外植物観察会を開いている。ある年には夏休みの2日間を利用して合宿形式で1冊の本を輪読したこともあり、その時々各会員の要求に自在に応じている。また、会の名称は以前からの種子植物談話会を踏襲しているのであるが、種子植物のみならず、シダ植物やコケ植物を研究している方々にも会に御参加頂き、いろいろな角度から植物の実相を明らかにするべく議論している。その間、1981年に「日本の植物/研究ノート(培風館)」、1994年に「植物の自然史(北海道大学図書刊行会)」という2冊の著書を種子植物談話会が中心となってまとめている。

私達(田村 実と藤井伸二)が岡本素治さん(大阪市立自然史博物館)と植田邦彦さん(当時大阪府立大学)から種子植物談話会の世話役を受け継いだのは1990年のことである。その後、世話役は岡崎純子さん(大阪教育大学)と藤井伸二、藤井伸二と西野貴子、藤井俊夫さん(兵庫県立人と自然の博物館)と藤井伸二と引き継がれ、現在は田村 実と布施静香がお世話している。

今年度の種子植物談話会の発表会は4月28日、6月23日、10月27日に大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園で行われた。4月28日は中米と東南アジアの隔離分布成立の歴史などについて、6月23日は種の分布域の変遷史をDNAでどの程度追えるのかなどについて、10月27日は雑草の植物地理をどのように考えればよいのかなどについて議論された。プログラムは以下の通りである。また、8月26日と27日には野外植物観察会を和歌山県紀伊大島の京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所を基地として行った。この観察会については、別報で詳しくご紹介する。次回の種子植物談話会の発表会は12月22日に行われる。

[4月28日]

田村 実(大阪市大・理):

「キンコウカ(キンコウカ科、広義のコリ科)の遺伝的多様性解析の際の問題点」

Syamsuardi(大阪市大・理):「Genetic diversity of *Ranunculus japonicus* (Ranunculaceae) in Japan」

東 浩司(京都大・理):「モクレン科の系統進化」

[6月23日]

美和秀胤 (京都大・理): 「ヒメジャゴケ (*Conocephalum japonicum*) の分子分類学的研究」

瀬戸口浩彰 (京都大・総合人間): 「分子系統と分類地理」

小菅桂子 (神戸大・理): 「メギ科の系統関係と隔離分布の歴史 - matK と adh 遺伝子の情報をもとに」

[10月27日]

中川政治 (京都大・総合人間): 「日本の山岳地帯におけるイタドリの葉緑体 DNA 多型とその植物地理学的考察」

青木大輔 (大阪府大・農): 「ヒエ属植物の分子系統: ITS と cpDNA からみた栽培ヒエの起源」

高野温子 (兵庫県立人と自然の博物館): 「ISSR を用いたショウガ科 *Globba* 属の集団のクローン構造の解析」

種子植物談話会からの報告・2・

- 野外植物観察会 2001 で観察した紀伊大島とその周辺域の植物

田村 実 (大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園)・藤井伸二 (大阪市立自然史博物館)・西野貴子 (大阪府立大学総合科学部)・山下 純 (大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園)・布施静香 (兵庫県立人と自然の博物館)

今年度の種子植物談話会 - 野外植物観察会は、8月26日と27日に、和歌山県紀伊大島の京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所を基地として開催された。期間中、同実験所の山河重弥さんには大変お世話になりました。この場をお借りしまして、改めて御礼申し上げます。どうも有難うございました。今年度の野外植物観察会の参加者は、青木京子さん (京都大学)、Syamsuardi さん、Tesri Maideliza さん、Sudarmono さん、長岡真由子さん (大阪市立大学) と著者ら5人であった。

8月26日はまず実験所から南方に赤崎まで歩いた。実験所付近は、天然植生と植栽植物とが混在する半自然状態の照葉樹林であった。株立ち状の大径のスダジイが特筆される。林のサイズとしては、島の北端の黒鼻周辺にあるスダジイ林に匹敵するだろう。スダジイ、タブノキ、ヤマモモ、モチノキなどからなる良好な照葉樹林環境が部分的に残されていた。林床には実の大きいアオノクマタケランが多く生え、ミミズバイ、ハクサンボクなどの低木も生育していた。タヌキらしき動物の糞からはタブノキの実生が密生していた。人為が加わったとはいえ、島の大部分の植生が攪乱を受けていることを考えると、手軽に照葉樹林植生を観察できる貴重な存在である。近年は、照葉樹林内にタワーが建設され、研究目的の樹冠へのアクセスが可能となっている。林縁には、ススキともハチジョウススキとも決め難い植物が生育していた。

赤崎は海岸に突き出した小さな岬である。赤崎よりやや内陸側では、ウバメガシ、

ヤマモモ、ヒサカキ、トベラ、シャリンバイなどの低木からなる海岸型照葉樹林が発達していたが、海岸近くの岩崖環境では低木はまばらになり、クロマツ、ハマヒサカキ、トベラ、シャリンバイ、テリハノイバラなどが生育していた。海岸の岩場にはヒメヤブランがしがみついていた。赤崎周辺の植生は紀伊半島南部の海岸付近のものとしては一般的である。その後、赤崎から樫野崎に向かったが、道中でシラタマカズラ（写真1）を見て、樫野崎で芝生に生える植物を観察した。



写真1：シラタマカズラ

8月27日はまず紀伊大島の水田植物を観察した（写真2）。2枚の湿田に生育するスブタが特筆される。他に、ヤナギスブタやホシクサなど、近年急減しつつある水田雑草がこの2枚の湿田では良好に生育していた。周辺には10枚程度の田んぼが存在するが、湿田環境を保っているのはわずかに2枚のみで、他の田んぼではスブタなどは見られなかった。水田雑草の生育にはわずかな条件の差異が大きく影響しているようだ。

次に、金山を歩いた。尾根付近はあまり土壌が発達しない乾燥した環境で、高さ2~3mの海岸型照葉樹林（写真3）が卓越していた。上層木としては、ウバメガシ、モチノキ、タイミンタチバナが多かった。その他、ヒノキバヤドリギ、ヒメハギ、コガンピなどが目についた。

その後、紀伊半島に渡り、那智山に向かった。紀伊半島では、リアス式地形が発達しているので、干潟やその後背に成立する塩性湿地は少ないのであるが、紀伊大島と那智山の間では、小規模ながらシオクグが卓越する塩性湿地が発達していた。泥質土壌ではシバナ、砂質土壌ではナガミノオニシバやイソヤマテンツキなどの生育が見られた。那智山では、陰陽の滝付近をシダ植物を中心に観察しながら歩いて解散した。



写真2：紀伊大島の水田

解散後、藤井伸二と西野貴子は熊野川流域に溪流植物を求めた。この地域には溪流に適応したと考えられる固有種がいくつかある。目的地は大きなひとかたまりの岩が川に突き出た溪流沿いのテラス状の岩場で、2日前の台風通過時には完全に水没した痕跡があった。川沿いの道を岩場まで歩く途中には、根こそぎ流れてきた低木が岩に引っ掛かっており、台風の強烈さを物

語っていた。岩場の上部に生育しているギボウシ属植物は、葉のちょうど広がる部分で引きちぎられていた。岩盤上に点在するサツキやアワモリショウマには、流されてきた様々な植物が引っ掛かっていた。そのような惨状の中で、岩盤の隙間にたまった土の部分にしがみつくように生えているホソバノギクは、まるで何事もなかったかのように純白の花を開いていた。

ホソバノギクは、本州と九州の酸性湿地に分布するサワシロギクに似ているが、茎があまり直立せず、しなだれるように柔軟で、茎の節間がやや短い点でサワシロギクとは異なるという印象をもっている。ホソバノギクの葉は、台風による激流にさらされたにもかかわらず無傷で、狭披針形の葉形と葉の付け根の柔軟性が溪流沿いの環境に適応していることを窺わせる。また、しなだれるような茎の柔軟性は、激流の中で折れずに耐えうる構造なのだろう。岩盤上には、ホソバノギクよりも水際に未開花のタニガワコンギク、より山側にアオヤギバナも見られ、どちらもほとんど台風のダメージは受けていないように見えた。同じキク科の溪流植物でも、いろいろなレベルの溪流環境に応じてうまく住み分けている様子がわかり、興味深かった。

以下に今回の野外植物観察会で観察した植物をリストとしてまとめた。特に実験所周辺では、もともと自生している植物と導入された植物との区別が困難な場合があるため、今回のリストでは自生/導入の区別をしなかった。なお、紀伊大島の植物の詳細については、1999年に京都大学大学院農学研究科附属亜熱帯植物実験所から紀伊大島植物目録が出版されており、秋山弘之さん(兵庫県立人と自然の博物館)が蘚苔類を、榎本 敬さん(岡山大学)・狩山俊悟さん(倉敷市立自然史博物館)が維管束植物を、種坂英次さん(近畿大学)がきのこ類をそれぞれ執筆されている。今回観察した紀伊大島の植物(きのこ類を含む)の中で、大島植物目録1(1940)にも上記目録(1999)にも載っていないものにヒノキバヤドリギ(ヤドリギ科)、コガンピ(ジンチョウゲ科)、オニカナワラビ(オシダ科)、シロテングタケ、ドクツルタケ(テングタケ科)、ベニイグチ(オニイグチ科)があった。また、大島植物目録1(1940)には載っているが上記目録(1999)には載っていない植物にネジキ(ツツジ科)、カタヒバ(イワヒバ科)、シシガシラ(シシガシラ科)、ナギラン(ラン科)があった。

[8月26日]

(実験所近辺: スダジイ林内と林縁)

種子植物: ナギ(マキ科)、ノシラン、ヒメヤブラン、サルトリイバラ(ユリ科)、ヒメドコロ、カエデドコロ(ヤマノイモ科)、アオノクマタケラン(ショウガ科)、メダケ、ススキ(?), チヂミザサ(イネ科)、コクラン、ナギラン(ラン科)、ドクダミ(ドクダミ科)、センリョウ(センリョウ科)、ヤマモモ(ヤマモモ科)、スダジイ(ブナ科)、イヌビワ(クワ科)、オガタマノキ(モクレン科)、ヤブニッケイ、タブノキ(クスノキ科)、イスノキ(マンサク科)、オオシマザクラ、ハウロクイチゴ(バラ科)、ミソナオシ、メドハギ、クズ(マ



写真3: 金山の海岸型照葉樹林

メ科) イヌザンショウ(ミカン科) アカメガシワ(トウダイグサ科) ヌルデ(ウルシ科) ゴンズイ(ミツバウツギ科) アッサムチャ、ヒサカキ(ツバキ科) ナンバンキブシ(キブシ科) カクレミノ(ウコギ科) リョウブ(リョウブ科) ミミズバイ(ハイノキ科) ネズミモチ(モクセイ科) テイカカズラ(キョウチクトウ科) シタキソウ(ガガイモ科) ヤブムラサキ(クマツヅラ科) オオバコ(オオバコ科) クチナシ、ヘクソカズラ、カギカズラ(アカネ科) ハクサンボク、サンゴジュ(スイカズラ科) ツリガネニンジン(キキョウ科) ツワブキ(キク科)

シダ植物: カタヒバ(イワヒバ科) ゼンマイ(ゼンマイ科) ウラジロ、コシダ(ウラジロ科) カニクサ(フサシダ科) フモトシダ、クジャクフモトシダ、イシカグマ、ワラビ(コバノイシカグマ科) ホラシノブ(ホングウシダ科) イノモトソウ、アマクサシダ(イノモトソウ科) シシガシラ(シシガシラ科) オニヤブソテツ、オニカナワラビ、オオカナワラビ、ホソバカナワラビ、イノデ、ナガバノイタチシダ、ベニシダ、ヒメイタチシダ(オシダ科) ホシダ、ミゾシダ、ハシゴシダ、コハシゴシダ(ヒメシダ科) ナチシケシダ、ヘラシダ、ミヤマノコギリシダ(イワデンダ科) マメツタ、ノキシノブ、ヒトツバ(ウラボシ科)

菌類: シロテングタケ、シロオニタケ、ドクツルタケ(テングタケ科) カワラタケ、ヒイロタケ(タコウキン科) ノウタケ(ケシキスイ科のクロモンカクケシキスイ在中)(ホコリタケ科)

(赤崎: 海岸型照葉樹林)

クススギカズラ、ヒメヤブラン(ユリ科) イソヤマテンツキ(カヤツリグサ科) ハチジョウススキ(イネ科) ヤマモモ(ヤマモモ科) ウバメガシ(ブナ科) トベラ(トベラ科) シャリンバイ、テリハノイバラ(バラ科) ヒサカキ、ハマヒサカキ(ツバキ科) ハマボス(サクラソウ科) キノクニシオギク、アゼトウナ、ハマアザミ(キク科) フユノハナワラビ(ハナヤスリ科) ハマホラシノブ(ホングウシダ科) マメツタ、ノキシノブ(ウラボシ科)

(櫻野崎灯台付近)

ナルコユリ(ユリ科) カエデココロ(ヤマノイモ科) フウトウカズラ(コショウ科) アコウ(クワ科) ヒメユズリハ(トウダイグサ科) ホソバカナワラビ、オニヤブソテツ(オシダ科) ホシダ(ヒメシダ科)

[8月27日]

(紀伊大島内水田)

オモダカ(オモダカ科) スブタ、ヤナギスブタ(トチカガミ科) コナギ(ミズアオイ科) ホシクサ、ヒロハイヌノヒゲ(ホシクサ科) ガマ(ガマ科) ヒデリコ(カヤツリグサ科) チョウジタデ(アカバナ科) キクモ(ゴマノハグサ科)

(金山: 海岸型照葉樹林)

種子植物: クロマツ(マツ科) ヒメヤブラン、ササユリ、サルトリイバラ(ユリ科) ウバメガシ、スダジ(ブナ科) ヒノキバヤドリギ(ヤドリギ科) シャリンバイ(バラ科) ヒメハギ(ヒメハギ科) ヒメユズリハ(トウダイグサ科) ハゼノキ(ウルシ科) モチノキ(モチノキ科) サカキ、ヒサカキ(ツバキ科) コガンピ(ジンチョウゲ科) カクレミノ(ウコギ科) モチツツジ、シャシャンボ、ネジキ(ツツジ科) タイミンタチバナ(ヤブコウジ科)

シダ植物: ミズスギ(ヒカゲノカズラ科) コシダ、ウラジロ(ウラジロ科) カニクサ(フサシダ科) ワラビ(コバノイシカグマ科) シンエダウチホングウシダ(ホングウシダ科) ハシゴシダ(ヒメシダ科) マメツタ(ウラボシ科)

菌類: ベニイグチ(オニイグチ科)

(串本 - 紀伊勝浦: 塩性湿地)

シバナ(シバナ科) シオクグ、イソヤマテンツキ(カヤツリグサ科) ナガミノオニシバ(イネ科) ハマサジ(イソマツ科)

(那智山陰陽の滝付近)

ジャノヒゲ、ナガバジャノヒゲ、ヤブラン(ユリ科) フユイチゴ(バラ科) オニトウゲシバ(ヒカゲノカズラ科) リュウビンタイ(リュウビンタイ科) オオキジノオ(キジノオシダ科) コシダ、ウラジロ(ウラジロ科) コウヤコケシノブ、ホソバコケシノブ(コケシノブ科) ワラビ、イシカグマ、フモトシダ(コバノイシカグマ科) ホラシノブ(ホングウシダ科) シノブ(シノブ科) イワガネゼンマイ、タチシノブ(ホウライシダ科) シシラン(シシラン科) ナチシダ、オオバノハチジョウシダ、オオバノイノモトソウ、マツザカシダ、アマクサシダ(イノモトソウ科) ヌリトラノオ、トラノオシダ、クルマシダ(チャセンシダ科) コモチシダ(シシガシラ科) コバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、リョウウメンシダ、イノデ、ジュウモンジシダ、クマワラビ、ベニシダ、ナガバノイタチシダ、イワヘゴ、カツモウイノデ(オシダ科) ホシダ、ヒメワラビ、ミゾシダ(ヒメシダ科) シロヤマシダ、ヘラシダ、ノコギリシダ、タニイヌワラビ(イワデンダ科) イワヒトデ、ノキシノブ、マメツタ、ミツデウラボシ、ヒトツバ、サジラン(ウラボシ科)

追悼

粉川昭平先生（1927-2001）

2001年10月25日午前1時12分、大阪市立大学名誉教授 粉川昭平先生は、肺炎のためお亡くなりになりました。74歳でした。心よりご冥福をお祈り致します。

粉川先生は、1927年奈良市にお生まれになり、第三高等学校、京都大学理学部地質学鉱物学教室を御卒業後大学院に進まれ、1957年大阪市立大学理工学部助手として赴任されました。その後1965年に理学部助教授、1972年に教授となられ、1990年に大阪市立大学を定年退職されました。その後は、1999年まで大阪千代田短期大学教授、同専任講師を歴任され、永きにわたり研究と教育につとめられました。

粉川先生は古植物学者として著名ですが、幼い頃から鉱物に興味をもっておられたこともあり、大学では岩石学を専攻されました。大学時代に研究された奈良三笠山安山岩の研究の過程で、周辺の鮮新世～更新世の地層から新発見の *Canarium* の核果を含む多くの植物遺体を採集されました。その植物遺体をメタセコイアの発見者である三木茂先生の指導を受けて研究し、古植物学の道に進まれました。

助手として赴任された大阪市立大学植物分類学研究グループには、三木茂教授、上野実朗助教授がおられ、三木先生の厳しく愛情のある指導を受けながら、古生物学と植物学を総合した古植物学的な研究を展開されました。1950年代から1960年代にかけては、学位論文となった「本邦におけるミツガシワ種子遺体の分布と層位」(1962)、「*Davidia* の内果皮遺体」(1965)などの研究に取り組み、1970年代以降は遺跡から産出する植物遺体の研究を中心に多くの論文を発表されました。粉川先生は語学に堪能で、学生を集めてドイツ語講習をされました。また、木々をこよなく愛し、古植物学の勉強のために植えられた木々は、大阪市立大学杉本町キャンパスで大木になっています。特に、近衛廉也先生といっしょに旧扇町キャンパスから移植されたナンヨウスギは大木となり球果をつけています。

著書である「植物の系統と進化」(田村道夫氏と共著,日本放送出版協会,1975)は、師である三木先生のヒシヤオニバスの研究をわかりやすく紹介し、ご自身のミツガシワの研究も加え、植物遺体研究の教科書となっています。また、「後期新生代の古果実学の材料」(築地書館,1975)では植物遺体の同定のポイントを解説するとともに、古果実学の勉強の方法について「鳥獣の糞や胃の中の種子、海岸の漂着種子を調べての練習。百貨店のナッツコーナー、八百屋、じゅず屋での勉強。通勤や通学の途中の植物の観察。」を推奨され、「芸術的感覚も必要、たとえば古今古往の陶工の名品に対坐しての思索が役立つ。」と書かれています。粉川先生はこれらを実践され、日々、自然観察を続け、果実、種子の他に根、材、菌核、昆虫、動物など、様々な標本をあらゆる機会に収集され、それらを大阪市立自然史博物館に寄贈されました。入院中にも奥様を通じてご自宅に置いてあった標本を自然史博物館に届けられ、ベッドには双眼鏡、吸虫管、考古学の本が置いてありました。このように自然を観察し、標本をこつこつ集め、古果実学だけでなく

自然史研究のための膨大な標本を残されました。また、三木先生の後を継いで自然史博物館友の会の会長を27年間の永きにわたりつとめられ、自然史博物館に寄贈されている三木先生の標本整理にも取り組まれました。

粉川先生の研究や標本に対する姿勢を学び、多くの論文と採集された標本を活かして、今後の研究をすすめていかねばならないと思っています。

塚腰 実(大阪市立自然史博物館)・田村 実(大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園)

連絡員から秋便り

シダ便り・1・

熊本大学 高宮正之

余は如何にしてシダ研究者となりし乎

シダ便りを担当します高宮です。3回の予定で記事を書きますが、分類学会会員にシダ研究の楽しみが少しでも伝えられたらと思っています。私一人では非力ですので、現在シダ植物を研究対象にしている研究者にアンケートをお願いし、その結果を集計・整理してまとめることにしました。まだ修士課程の学生から、アンケートをお願いするのも恐ろしい大先生まで、合計20名の方(私を含めて)からお答えを頂戴しました。ご多忙中ご協力いただきましたシダ研究者の方々、どうもありがとうございました。今回は、「シダ植物の研究を始めた動機」について整理いたします。

動機は以下の3パターンに整理できるようです。1. 中学や高校の時からシダ植物に関わってきた(7名)、2. 卒研や大学院のテーマで材料にシダ植物をすすめられた(10名)、3. その他(3名)。お答えの中からいくつかを原文のまま「」として抜粋いたします。大学名や人名は伏せてあります。

パターン1の人たちは、マニアックな人たちです。シダおたくがそのまま研究者になった方々とも言えるでしょう。「中学一年生のときに親父と尾鷲に行き、一枚のシダ(アミシダ)の葉に出会ったのがきっかけです。なぜかアミシダの葉の形と葉脈の不思議さに取り付かれ、どうしても自分の手で採集して見たいと思ったのがシダ採り少年になったきっかけです。それから尾鷲詣で始まり、もはや何回尾鷲に行ったのかとか、何日いたのかということはまったくわかりませんが、おそらくトータルでは500日を越えると思います」という豪傑や、「高校1年の冬に房総半島の南部で、林床を埋めつくすようにして生えるシダの群落というものを初めて見て、強烈な印象を受けた」「S大のS先生、T大のK先生などの直接の指導でフィールドワークの醍醐味を心底から味わったこと」「K博の小中学生向け講座でN先生、M先生の指導を受けたのが最初のきっかけ」など様々な出会いがあり、シダ好き少年(なぜか少女はいない)として育ってきたようです。

パターン2の人たちは、選択肢として偶然シダ植物研究を始めたようです。「卒業研究でついでに指導教官がシダ学者のI先生で、シダの研究テーマをもらったから。実際にシダの研究を始めるまで、植物分類学にもシダ植物(野生植物全体にも)特に関心はもってなかった」「家に比較的近いTK大学の大学院を受験して分類生態学講座に入った。ここではI先生がシダ植物の研究を指導されていた。そのため自分もシダ植物を研究することになった。わたしにとっては生きた植物をいじることができれば、対象は何でもよかった」「K先生に憧れてK大学の植物分類の研究室に来ましたが、K先生が近く定年になる事を知らされ、M先生の弟子になりました。それで、『なにをやりたいわけ?』って聞かれたのですが、不覚にも言葉につまってしまい、M先生に言われるまま、シダの研究をやることになりました」というまったく偶然シダを相手にした方々、「植物学教室3年の臨海実習で海藻の分類実習を受けた時、分類学はなんと遅れた学問かと改めて実感したが、実習外ではI先生と親しく接する機会があった(お酒をたくさんごちそうしていただいたのが「接した」最大の出来事であった)。先輩の学生の反対や自身の不安もあったが、結局、植物分類学の研究室に大学院生として進んだ。ですから、シダ植物の研究に携わるようになったのは、I先生がシダをやっておられていたからだった」と不安を感じつつ関わった方、「自分の大学にも世間にも大いに不満をもっていた身としては、他大学の先生で、しかも人とは違った分野、要するに‘はやっていない’分野の研究をしようと思った。これがC大のN先生の門をたたいた所以である」と強い決断で研究に入られた方様々でした。先生の影響はやはり大きいですね。しかし、何れの方々も、偶然入ったシダ研究をきっかけにして、この道に興味をもち、深く関わって来られたようです。「実際に卒業研究を始めてみて、シダ植物のおもしろさ、植物分類学の奥深さが理解できた。また、自分がシダ植物の分類学に十分関心がもてることもわかった。自分の本当の興味や適性は、なかなか自分ではわからないし、みつけれないものである。私は運が良かったのだろう」というお答えが代表しているように、その魅力はやってみなければわからないようです。

パターン3の人たちは、「分類が難しく、田川図鑑に夢中になったこと。そしてなんともいっても美しい」という自分から虜になった方、「近くに失恋してシダの道に入った人間がおり、つい似た道を歩いてしまった」というなんとも評せない方、「陸上植物の中で最も系統関係が良くわかっておらず、陸上植物の形態、発生進化を研究するうえで鍵になる分類群だと思ったから」という素晴らしい気構えで研究をスタートした方でした。

シダ植物の研究者は、他の分類群を扱う方々からはとかくマニアックに思われがちですが、どうしてどうしてけっしてそんな人ばかりではありません。シダ植物を扱ったことの無いあなた!それは食わず嫌いで運が悪かったのかもしれませんがよ。

今回は、シダ植物研究の魅力について皆様のお答えを紹介する予定です。

亜熱帯の島便り・1・

琉球大学・理・海洋自然科学科 傳田哲郎

ウチナーヌアチ（沖縄の秋）

今年の沖縄は記録的な猛暑と台風によって大きなダメージを受けた。六月中旬以降、気温30以上の真夏日が連続77日間続き（観測史上最高）、暑さでまいったところへ長っ尻の台風が追い打ちをかけたのである。植物にとっても泣き面に蜂である。厳しい環境に耐える海浜植物でさえ、一時は枯死したかのように茶色く干からびた姿をさらしていた。

そんな夏が過ぎ去り、今はもう秋。10月に入ってミーニシ（新北風）が吹く季節となり、亜熱帯の島もずいぶん涼しくなった（余談だが、10月初旬に沖縄で日本哺乳類学会が開かれ、北海道からも多くの来訪者があった。秋風吹く沖縄も、彼らにとっては“今年一番の暑さ”だったとのこと。かくも日本列島は南北に長いのである）。海岸では、テリハボク、ハスノハギリ、オオハマボウ、アコウ、テリハクサトベラ、モンパノキなど、沖縄の海岸林を特徴づける木本植物たちが揃ってみずみずしさを取り戻している。深い緑の中から伸び上がる黄緑色の若葉が、厳しい環境に生きる植物達の生命力を感じさせる。

隆起サンゴ礁上の植物たちも同様である。初秋の主役はウコンイソマツ。夏の間は息も絶え絶えに見えた彼らが、波しぶきをかぶる隆起サンゴ礁の上で黄色い花を咲かせ華やかさを競っている。ソナレムグラの可憐な白い花や灰白色の毛に覆われたモクビッコウが趣を添え、ちょっとしたお花畑の観がある。内陸の植物を寄せ付けない飛沫帯の厳しい環境も、彼らにとっては居心地の良い楽園なのだろうか？ウコンイソマツに聞いたら、沖縄風に「だからよ」と答えるに違いない（“そうなのよ”に近い意味だが、肯定・否定のいずれの場合にも使われる。質問者はこの哲学的な一言ですべてを悟らなければならない）。目が眩みそうな空と海の青、波の飛沫に黒く濡れた



ウコンイソマツ

隆起サンゴ礁、その上に広がる黄色いお花畑。鮮やかなコントラストをなす色彩にヤマトンチュ（大和人）の郷愁を誘う寂寥感はないが、これも沖縄に秋の到来を告げる風景の一つである。

ウコンイソマツは背丈は小さいながら木本であり、盆栽用としても人気がある。また、全草を乾燥させたものに薬効があり、関節炎・高血圧・解熱・鎮痛等々に効くとされている。基本品種であるウコンイソマツはまだまだ普通に見ることができるが、淡紅紫色の花を咲かせる品種のイソマツは、薬用の採集によって数が減少しているという。猛暑よりも、台風よりも、恐ろしいのはやはり人である。

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
日本植物分類学会 高野温子(会計幹事)
Phone 0795-59-2012, Fax 0795-59-2019
E-mail: takano@nat-museum.sanda.hyogo.jp

平成13(2001)年11月19日印刷

平成13(2001)年11月26日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町

発行人 名古屋大学博物館

西田佐知子

発行所 東京都文京区白山3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内

日本植物分類学会

郵便振替 00120-9-41247